

重度心身障害児への人間学的接近（第9報）

—施設を生きる—

江口昇¹⁾

はじめに

重度心身障害児・者の「発達」・「自己実現」といったテーマは、それ自体がきわめて限られた範囲における能力発揮、能力開発という意味を持っている。そのことは、たとえ万全の設備・環境等の条件が整い、十分な治療・教育が施されたにせよ、その発達可能性を開花せしめることが至難の技である、ということの意味している。しかし、現実には、生きた重症児がそこにいる限り、できるかぎりの発達援助がすすめられねばならぬし、その方法が工夫され、具現化されねばならない。

それと同時に、私どもは、現実に機能し、活動している施設そのものをも見落すことはできない。小説ではあるが、重症児施設をテーマに、施設の実態を描き出した、朝海さち子はその著「谷間の生霊たち」の中で、施設で働く職員や、収容されている人たちの、生々しい現実の姿を浮き掘りにしてきている。くわしく述べることはここでは避けるが、ただ私どもは、このような過酷な現実問題を素通りして、障害児・者とかかわりだけを云々することは、物事の本質を見失う結果になりかねないことを重々にわきまえておかねばならない。

収容施設、それ自身を問題とする時、そこには、管理者・職員・収容者の三者の立場があり、おのおの、「労務管理・安全管理」、「労働者の権利拡大」、「発達保障の権利」を主張している。管理者サイドの視点は別として、毎日の生活状況において、顔と顔とをあわせ、直接的にかかわっている〈施設に働く人間〉と、〈収容されている人間〉との間には、高い緊張関係がみいだされる。表面にこそ出ないが、激しく対立する何かが、底に流れている。そこには、双方とも、たがいに、譲りあう余裕もない、生きるための権利主張がある。

このような施設状況の中で、私どもの立場は、三者のいずれの側にも組することなく、管理者の発想から解放され、〈第三者的無責任性〉を傷としてもちつつ、自由

にかかわることが許された、特殊な存在である。この特殊状況で体験したものを、以下に記していきたいと考える。ただあらためていうまでもなく、現実の諸問題を克服し、改革することは、まさに、日常性の内においてのみ可能であり、それを実践しうるのは、日常性を生きている人たちにしか可能ではないのである。私どもの立場は、あくまで、〈第三者〉であるということ、このことをここで今一度深く自戒しておきたいと考える。

I 脳性マヒ児「タカシ」

私は、この年、この重症児者施設、こぼと学園、中1病棟で、ひとりの「人間」と出会った。私が、ここで彼のことを書いてみたいという気持ちになったのは、彼の存在、生きざまに共感したからである。単に共感したのみならず、彼の存在をほかの人にも伝えたい、そしていっしょに考えて欲しいという、内からの衝動に近い何か私をつき動かしたからにほかならない。

「タカシ」（仮名）18才、脳性マヒの診断名を持つ男子である。この施設に収容されて8年が過ぎた。彼が10才の時からである。それ以前は福祉行政からも、公教育からもはじき出され、重症心身障害の在宅児として、家庭に放置されてきた。もちろんこれは、公的サイドの見方からすればということであり、本人や家族が何もせずに過してきたということの意味では決してない。ただ彼の側からすれば、彼に与えられた、生活圏としての世界が家庭のみであったということの意味している。そして、彼が10才で、この施設に収容されるまで過した家庭も、決して尋常なものではなかったようである。父、母、兄、姉、妹、そして本人である彼を含めて総勢9人の大家族である。しかも、長兄は難病といわれる筋ジストロフィーにかかり、闘病生活の末、数年前に死亡している。彼は長く身体障害児として身体障害児施設に籍を置き、そこで人生の大半を送ったのである。続く長姉も長兄と同様、筋ジストロフィーをわずらい、長兄のいた身体障害児施設に18才の時まで籍を置いていた。しかし、児童を対象とするその施設は、18才以降の措置は認められぬとの規則にもとづいて、家庭にさしもどされ、以後彼女は、

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期課程）

家庭内にあり、食事はなんとか自立できるものの、他の日常的な身辺処理には多大な介助を必要とし、家族のうち誰かがその任にあたっているという。次姉は嫁つき、次兄は働きに出ている。そしてふたりの妹は現在、学校に通っている。こうした家庭の状況は、たとえ彼が帰宅を希望したとしても、彼を受け容れる余裕がないのである。存在する場すらないのだ。“帰るわけにはいかない”このことを彼は熟知している。そして、なんとかして、この施設に残れるよう希望し、努力している。

私が「タカシ」について書きたいという衝動をおこしたのは、先にもふれたように、こうした彼の人となり、彼の生きざまに感動し、一個の人間存在としての彼に、心から敬意を払うようになったからである。彼との出会い、そして彼とのかかわりはわずか5日間、その中でも本当に語り合えたのは一日一時間ぐらい、総計しても数時間にすぎないものである。彼を理解するにはあまりに少ない時間であった。しかし、彼を知るには、多くのコミュニケーションは要らない、時間も必要ではない。彼の人となりは、彼の毎日の真剣で、控え目ながらしっかりした生きざまを私自身のなまの眼でみただけで十分であろうから。

その一端を、彼の文化獲得のプロセスを例にして紹介することにしたい。それは、文字修得から他者とのコミュニケーションへ、さらに自己の意志表明の手段としてのタイプライターへのとりくみである。

前述の如く、タカシは18才の今日まで、一度として公教育の思恵を受けてこなかった。彼には、机や椅子、教室や学校はもちろんのこと、教科書すら与えられなかったのである。タカシは身体障害こそ重度であるが、知的には何らの障害はなく、平均値程度の知能を有している。それ故に、学ぶ機会さえ与えられたならば、彼は普通に一般的知識を苦労しないで修得できたであろう。遺憾ながら、彼はその機会を享受することができなかった。彼は独学によって勉強を始めた。先生も学友もない彼の勉強、それは、お古となった妹たちの教科書から始まったのである。身体的緊張で硬直した指先をじっとこらえて、一字一字押さえては文字を覚えていった。

施設収容後、彼は、自分がおかれた場所を利用することにした。つまり、彼が住んでいる病棟内にある貼り紙、それには一日のスケジュール、年間のスケジュール、注意書き、収容児の名札等がある。それらから、漢字を選び出し、一つ一つを丹念に覚えていったのである。ともすれば、より安易な生き方——収容施設に措置されると、生きていく最低条件は保障される。それ故に、ただ生命を保つだけの植物人間的な生き方もできるし、そうした存在様式を身につけた収容児・者も少なくない。

——に身を委ねてしまいたいという気持と闘いつつ、あえて厳しい道を選択したのである。こうしたことを彼は、何ら気負った風もなく、単調な日常生活の中に埋没しながら、淡々と行なっていったのである。

ひらがな・漢字という文化獲得の必要条件をそなえた彼は、次に、施設内外の人たち（職員もいれば、同じ立場の収容児・者、実習生など）と、それぞれの立場から、意見の交換を始めた。それを通して、この世界のこと、福祉のこと、障害児・者のおかれた状況・今日の問題などを深く理解するようになっていった。今、彼は彼なりのはっきりした〈自分の考え〉を持っている。自分の体験に根ざし、身をもって学んだ、まさに生きた知識を有している。毎日、決められた3時間を、タイプライターの前ですごす。じゅうたんに横たわり、震える指先に意識を集中させ、キーを押していく。手紙を書くこと、そしてそれによって他者とコミュニケーションすることが、彼の「生きている」証しなのである。手紙の中に、彼は自分の夢と希望を託している。こうした文化獲得プロセスは、彼の、「人間として、生きてゆきたい」というしんそこからの思いによるものと思われる。

Ⅱ 「タカシ」の見た病棟

タカシは収容されてすでに8年、この施設に住んでいる。その間、1～2回の転病棟を経験した。では、彼はどのように病棟を見、感じているのであろうか。彼は実に鋭く、冷静に病棟を分析し、客観的に批判している。同時に、あたたかく、つつみこむような優しさでこの病棟を見ているのだ。

彼は、はっきりと「この病棟、この施設に対して、不平、不満、憤りはいっぱいある」と言う。そして、それらの原因がどこにあるのかも知りすぎる程知っている。それでいて、その状況の内にいる自分であることをもまた強く自覚している。彼は、次のように言う。「毎日感じる不平・不満はいつも、自分の胸の内にしまっておく、ときどき頭をもたげてきてもそれを押し殺し、必死で抑えてしまう。もし、一度でもそれを口に出すようなことになったら、それはもうおさえ切れなくなってしまいそう。次から次と不平、不満があふれ出てきて、とても自分じゃ抑えられぬ勢いになるだろう。万が一、そんなことになったら、それがどんなに恐い結果を生じるのか自分でもわからない。おそらく病棟内は大騒ぎとなり、メチャクチャになってしまうだろう。だからボクは、口が裂けても、決して言わない。たとえ、自分にとって最後の依り所であるタイプライターを禁止されたり、取りあげられたりしても、素直に従うつもりだ」と。

その口調はおだやかで、淡々としている。しかしその

中には気迫がこもっていた。では、彼が言う病棟への不平・不満とは何か。第1には、施設から収容児・者への管理の厳しさ。たとえば手紙の検閲、グループで話し合う場合の許可制度、何かを企画しようとする際の届出制度等、それらは、たしかに施設運営・安全管理上必要なこともあるであろう、しかし、それ以上の締めつけを感じると彼は言う。

第2には、職員の収容児・者の扱い。もちろん、そこには職員不足や過酷な労働スケジュールが原因していることは理解できる。職員サイドから見れば、オムツ交換、食事介助、機能回復訓練といった、生きていくための最低条件を維持することを努め、さらに彼らの機能回復をめざせばめざす程、必然的に労働強化となり、身体次元のかかわりは多くなるものの、情緒的な、あたたかいかわりかわりは犠牲にされかねない、結果としては労働ノルマの消化が第1目標になってしまう。一方、収容児・者にとっては、人手不足は理解できても、一人前に成長した人間が、異性の前で裸にされたり、トイレ介助をせらうことは、それ自体たしかに屈辱的であろうし、羞恥にたえないであろうことはよくわかる。またたとえ多忙であることは理解できても、識らず識らずになされる事務的な非人間的で、冷たいとしか感じられない扱い方にはどうしても反撥を感じてしまうのである。

第3には、収容児・者の個人的要求が十分満たされないことである。職員にいっしょに遊んで欲しい、悩みを聞いてもらいたいと思っても、忙しそうに働く職員をみていると、1冊の本を取って欲しいということすら、遠慮せざるを得なくなってしまう。雰囲気として、とてもそんな要求は出せないという。さらに、収容児・者の知的能力の格差はかなりの巾があるにもかかわらず、収容児・者全体としてみれば、能力は低く、さらにその上、限られた空間・世界しか持たない彼等は、自ら学び取る機会も乏しい。それ故に、保育・療育内容はどうしても低年齢を対象としたものとなる。それらがタカシにとっては幼稚なものに見えるのは当然である。18才の普通知能児に、幼稚園児になれというのは土台、無理な注文である。しかし、そうした状況にもめげず、病棟内において、彼は喜々として、療育スケジュールに参加しているようによそおっている。それはまさしくきびしい現実としかいいようがない。

Ⅲ その病棟に生きる「タカシ」

私がタカシと最初に言葉をかわした時、彼は、「何故ボクがここに入ったのか理由がわからない」と言った。重症心身障害者施設の入所規程からすれば、彼には入所資格がないはずである。しかし、いま彼はこの病棟・施

設にどんなことがあってもとどまりたいという。彼の家には彼が存在できる場はないからである。

「よその児童収容施設では18才になると必然的に追い出される。しかしここでは、今のところそういうことはなさそうだ。ボクはここで生きてゆく」そう言うタカシは、他の知的に高い収容児にありがちな施設内エリート児にはなることを拒否する。表面的には日常性の中に埋没し、日々を慣れ合いの中で一見楽しくすごしているようである。しかし、彼は、自分たちの現状に決して満足しているのではない。彼なりに、先にも述べた強い不満と怒りを持っている。そしてハッキリと「ボクはここをかえてゆきたい」と私に断言するのである。

その彼の日々の過ごし方を、職員との関係でみてみよう。「ここでは、家にいるときと言葉づかいが違う、家ではつい地が出て方言で喋ってしまうが、ここではどうしても丁寧な言葉づかいをする。笑われたくないから……でも時々ボロが出る。そんなときはとても恥ずかしい」こう言ってテレル彼は、常に職員に対して細かな神経を使い「感謝の辞」を忘れることはない。甘えたり、わがままを言うこともない。自分が中心になることを好まない。彼は病棟内でひっそりと、遠慮深く生活している。彼は自ら言うように「決して職員の指示にさからわない」で、愛される園児になりきろうとする。

私と話をしているさいちゅうも用心深く周囲に気を配り、まったく私が気付かないときでさえ、自分で気付いて職員の指示に大声で「ハイ」と答える。彼の極端とまで言えるこうした素直さ、従順さは過去の生活の中で、自らからだで学びとってきたものであろう。そして、より深い所で、この病棟を内から変革しようとする気高い意志があるからのように思われる。さらに、自己の障害をこそ成長の糧として発達したいと彼は言う。彼の自己実現への意志によるものであろう。

それにしても、若干18才の少年が、かくもみごとに生きているということは、私にとって驚きであり、衝撃であった。タカシの願望、しんそこの思いは、「この病棟の現実をひとりでも多くの人に知ってもらいたい。少しづつでもよいから現状を改善してゆきたい」というものである。そして、「その為には、病棟をみてもらっても通り一辺の見学では意味がない。いっしょに生活し、ありのままの姿、本当のところを体験し、実感してもらい、その上で、いっしょに考えて欲しい」とも言う。さらに彼は、「しかし、そのことは、いまいる職員との間ではどうしても駄目だ、ここをやめた人となら手紙のやりとりもしているけど、現職の人とはどうしても話が出来ない」と付け加える。そのひと言は、さながら8年間の苦しく、厳しい施設生活から生まれた、心の屈折した様

そのままに見せつけられるようであった。それは決して、単なる職員への批判ではない、どうしようもない現実のありさまを表明したにすぎない。何故なら、彼は、職員の立場自体を誰よりもよく理解しているのである。十二分にもわかった上での、先の発言であるといつてよい。

IV 「タカシ」と私

タカシに対し、私は始めの頃、ひとりの収容児（園児）として接していた。そこには、一般的な重症心身障害児のイメージを持った、長期間施設に収容された一つの名を持った存在ではなく、多くの収容児・者を総称するものであり、ひとりびとりの個性をカッコにくくった見方があったと思われる。しかし、2日目、3日目と彼とのかかわりを重ねていくにつれて、私はそこに、一個の人格を持ち、固有の名を持って、その存在を身体ごとに表現し、「生」を生ききっている存在として彼をみるようになった。私は次第に、「園児」ではなく、人間として、対等な関係で接してゆくよう努めはじめた。

こうした私の側での態度の変容は、最初彼をかなり不安にさせたようであった。職員に対すると同様の、例の「デス・マス調」の話し方がなくなるには、少し時間が要ったし、何よりもタカシと私との、ふたりだけの空間が必要であった。その時以外は、彼は私を準職員として、また実習生としてながめ、園児としての役割をとっていた。おそらく、そうしなければ、彼の中にはりつめている「忍」の構造がもろく崩れてしまうのではないかと言う不安を持ったのであろう。

しかし、私の接し方がかわってきた意味が彼に了解された以降は、彼も私と対等な関係で話し始めるようになってきた。もちろんそれは、職員がそばにいない時に限られてはいたが。4日間、午後4時から5時まで、私たちはふたりだけでのプライベートな時間を持つことと取りきめたのである。そして、公刊される形のものの中にはとても記すことのできないさまざまなことが、そこでは話し合われた。ただふたりの会話の場合といつても、どちらかといえば彼が一方的に話し、私はただ聞くことに終始したように思われる。私は最後まで、自分の裸心を見せないままであった。私にはそれができなかった。恐しいと思った。

絶対「無」の中で「生」を生きている彼に、私は返す言葉がない。おそらく、それをことばとして表現することは、彼を失望させるだけのことでしかないのではないかと思ったのだ。何か言えば嘘になる。欺くことになる。薄っぺらな同情をするよりは、ただひたすら彼の言葉に耳を傾けることのみで努めつづけたつむりの5日間であった。

おわりに

重度心身障害児・者の「自己実現」が、理念として、「自己の本質を生かしきること」、「実存的負い目を自分のものとして受け入れること」にあるとすると、「タカシ」の生き様の中に、多少なりともそのことを見出すことができるのではないだろうか。

しかし、それにしても施設の現実にはあまりに厳しい。この厳しさの原因は、単純に施設職員に帰せられるべきではなく、福祉体制そのものの中にこそ、根本的な原因があるものと考えられる。だが、今、この時点においても、施設は「そのまま生きて」いる。職員にとっては大切な職場でもあるこの施設がまた、「タカシ」にとってはまさに、日常を生きる「くらしの場」であることを思うとき、どこに原因があろうとも、厳しい施設の状況はなおより一段と改善されていかねばならないであろう。

この秋、「タカシ」から一通の葉書きが届いた。文面は簡素なものではあったが、この一通を完成させるのに「タカシ」のついやした労苦は大変なものであったであろうと想像される。床に寝ころび、全身の力を親指にこめて、一つ一つ、パチン、パチンとはじいている「タカシ」の姿が思い出された。私はこの葉書きを今も大切に保存している。最後に、「タカシ」の願いく施設が真に、人間の生きる条件をみたした「くらしの場」になることが一日も早く実現することを心から祈るものである。

文 献

- 村上英治・蔭山英順・加藤義男・沼尾孝平・伊藤紀子・赤塚大樹 1970 重度精神薄弱児への人間学的接近（序報）——かかわりの体験をとおして—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），17，1～19
- 村上英治 1971 重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）——“私の内なる障害児”への志向—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）18，1～15
- 朝海さち子 1975 谷間の生霊たち 筑摩書房
- 辻誠 1971 心身障害児（者）における生の意味と教育——その実存分析的考察—— 特殊教育学研究 9.
- 尾野成治 1974 現存在分析の立場からみた精神療法的態度——心身障害児との関連において—— 福島大学教育学部論集 26，33～44.
- 尾野成治 1975 現存在分析の立場からみた態度価値（V. E. Frankl）——心身障害児との関連において—— 福島大学教育学部論集 27，14～26.

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY PHYSICALLY AND MENTALLY HANDICAPPED
(the 9th report)

– The Process of self-actualization of one handicapped child in the “Institution” –

Norio EGUCHI

The purpose of this report is to clarify the process of self-actualization of the handicapped child named “Takashi” who lives in the Middle 1st Ward in Kobato-Gakuen Institution.

Although there are many difficult conditions in the daily schedule of the “Institution, Takashi has made his first effort to communicate his thoughts to others.

At the present time, he is able to express his thoughts by using a type writer. Because he has no other place where he can spend a stable life in the future, he has learned how to live obediently in the “Institution”. Despite the difficulties of being there, Takashi has a positive attitude to life. Such a way of living moves my heart strongly.

Furthermore, it is certain that there are serious problems in the “Institution”. The Institution is not only the occupational place for the staff who works there but also the life space for the handicapped. Consequently, there are some high tension conflicts between the staff and the handicapped. In order to improve the situation both groups have to make every effort to communicate with each other.